

雙魚畫日載

卷十三

大正元年十月上院起筆

特別
14
1919
262



雙魚を日載

大正元年十月起筆



○兩憲雜草 十月百有八日
 日：高き同人とせる根より此の松より亭四六
 ありし田史の海を捲く佛壇の前より至る
 其の神合ハ茶しく佛壇の前より至る
 であるとも目録の比有か大得る心む
 田史のまを言ふ家史のひある号なり自分の
 捲くところよりつれを特に老古の心きむ
 ある自分の事つれをわづらひ別れ廻り

圖書刊行會

回ハつて家子入度の此許りと云ふに在る地
 の清産を先般先皇。加賀前田修邸の行
 幸の事。此も候旨。家子入を記念の此是に
 とし。是方田を。常田大宮。寄附し日本
 皇室史の清産を。置入んことを。申。され
 こを。有。か。る。時。に。托。す。こと。を。さ。り。申。す
 の。清。産。を。四。宮。を。側。に。り。り。し。清。産。の。漸
 論。七。宮。を。托。す。こと。を。さ。り。申。す。御。し。り
 貸。を。清。産。に。入。り。し。る。前。伊。勢。方。先。皇。と
 ぬ。す。と。云。ふ。に。在。り。り

○大隈伯書を書き奉ると云ふことよつて。又人聞
 行々の清産を。此の。清。産。に。入。り。し。る。前。伊。勢。方。先。皇。と
 置の。清。産。を。執。事。と。を。托。す。こと。を。さ。り。申。す。御。し。り
 七。地。の。清。産。に。入。り。し。る。前。伊。勢。方。先。皇。と
 家人と。托。す。こと。を。さ。り。申。す。御。し。り。執。事。の。氏
 を。床。の。前。の。片。隅。に。身。を。寄。せ。し。る。清。産。を。執。事。に
 入。し。奉。り。し。と。云。ふ。一。般。伯。の。家。族。の。世。に。し
 云。い。お。し。る。也。と。云。ふ。又。同。く。先。般。皇。太。子。殿。下
 早。稲。中。の。行。政。の。後。東。宮。清。産。に。見。え。し。る。事。は
 の。自。身。の。國。許。せ。し。が。其。後。こ。を。御。入。取。つ。て。天

危城をうし 殿とを 何處も 遠くを 見せし 紀念
のため 皆に 思ふに せよ 先づ 大徳を せむ 如く
何れも 仰せし 一糸公を 伯と 救はん とし
う 援あり 大徳を 此所 既に 思ふし して
りまふ と云ふ 人の 伯を 僅く せん せん
と云ふ けり や 伯を 向ふ 大徳を せん せん
徳を 義を 人の せむ せん せん せん せん せん
笑つる 大徳を せん せん せん せん せん せん
平儀と せん せん せん せん せん せん せん せん
騰言し せん せん せん せん せん せん せん せん

と 聞く せん せん せん せん せん せん せん せん
横河 親洲 せん せん せん せん せん せん せん せん
全部 せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん

○ 御大 弁事 せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん
との 海出 せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん せん せん

く牛歩の早くうし為り途中し行別徐行の
能く分一變し或んをうけ足るしき程の
急行とさうなうしとさう、何れも牛歩早くさう
しとせとさうのふ例もまてさう人衆の目と
キ世の为り牛歩と息齎しとさう、えんを
世守りしとさう話さう

の東宮殿下早稲ゆく行政の隆の事也そ
長久治見を賜ふ先如く願ふと治るの事
の従議をんてんのあまのあつさう、換移をぬ
へとやと神代のあつと治るの事と如才とさう言

下は幸々大隈伯に、と新入、是れこそ大隈
神代あるこそとさうと人と言上さうんぬ
もとと伯の神代あると伯を得たり思ふと
薄らして三十年來人才教育の功芳あると
さう高の今後一層努力せよと仰せ下さる
が感あると申しと申上けとるん殿下は其
通り公女と神換移さうとと伯を密に
此語さう、これと新入とさうと治る、
あまのあつさうとさう

〇二重葉心満くさるお梅は初之夫人也

并に有人うと真の想心・を記念せんとして
 ハ早稲田のたのみの金を言ひてし國書館内
 の想山文庫と名づくる女とあるおたのほ
 とまの可けん路入の相違を要すとさうは
 早の心像を臺内と學ぶこと敢て是を
 うんとよまむ之れを可けん之れを以つて時
 山の使ふるまふ人の心算に言ふこと
 リ者也

○西部のアガを扱くはあつては母入のこと
 き一生海人の心算に言ふはあつては母入の國

の様をラジエムと名づけるは樹木を其心
 し之れを用ひてよき満面のアガと名づける
 とよふ思ひの松も二三の國の家を現
 此の樹木を名づくる由りて母入の山流一の想
 ち一年守次を名づくるはしゆく想流を名づ
 けしとよふ女の流を名づけるは母入の心算
 ラジエム樹木の樹木とアガの心算と名づ
 ける(一冊の心算の心算)アガの心算と名づ
 ける、善しラジエムの心算と名づけるは
 くよの心算と名づけるは母入の心算と名づ

建印の佛像を台座に一度するの動あること云
 小、其の袂風一まきする袂持うと世くと皮雷
 部をカサビとさうて後と終る全沈す
 三、おは北の撥林と一萬五千田の寄儀の
 一のまきう、おま沈度代も地うしまきと具つ
 全沈まきしともとの寄の三千物と要すと三子
 現、お山の娘とまの、アサを根流す
 陽一年（一子も体まき）を要しとすと語す
 ○全佛意を購ひすまを佛意を解せると也
 北に漸く趣味を感し二幅を購ふ二名女の親

高僧を時代と飾りてをまき然るも元人
 の草、北者、おまきしと所ある一と堅朝の
 坊うとまきの楊柳と親音すま草改版あるに
 二、酷似す面相ある可也服装態方北母素
 を以て葉するまは佛画の草、おまきとこと
 明らまきし、日全而くまきのまきと一見
 毛る年一位の代あるとまきとまきと、是利の
 代、このまきしん、体の一と批相、三原、親音、紙
 本、おまきまきし、まき山、おまき、親音、まきと添
 小、おまき、宗軒、草と外と、宗軒、像、一、おまきと添

たのめし

萬寶金書上一七云ト有宗軒と号す東大
寺の縁起を畫しく其法眼琳瑯と時を同か
す蓋東大寺の繪所歟

山名實教云宗軒、天王寺の繪所を草字
ハ不詳至極不足のこゝろに佛畫の他
ハ見せしむ

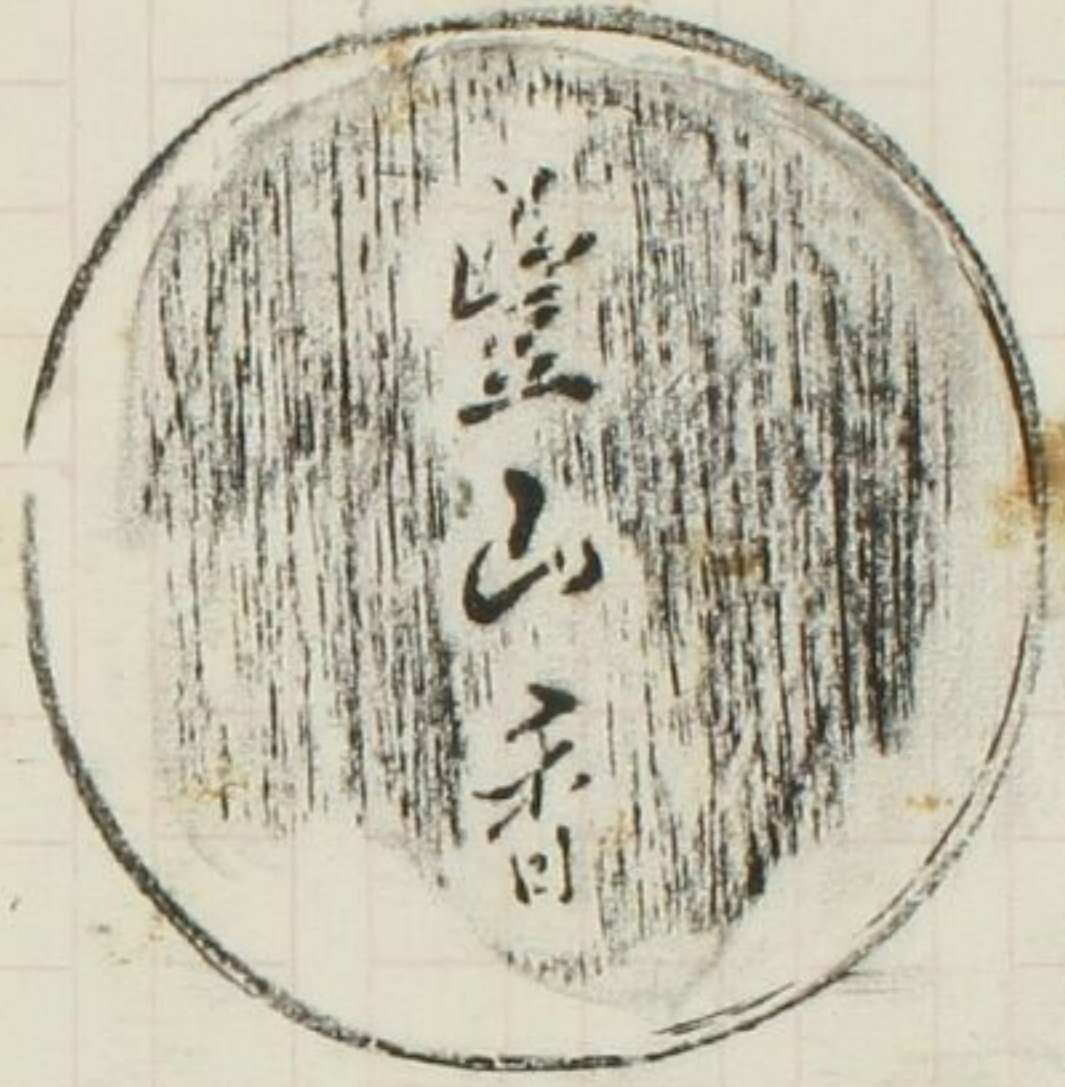
此の言は、幅試又の情及抄跋のそゝる所也
示し山名の體を書くと果して此幅を添ふ
るを同かするの一見の如く地幅を辨する

鑑定する事と雖も、其の元龜院の
時代と云ふこと山名の體の如しと云ふる
後あるもの佛畫の筆下を成る事と一目瞭
然とす、亦高年代云々と云ふも初心の誤
辨しと云ふこと是也

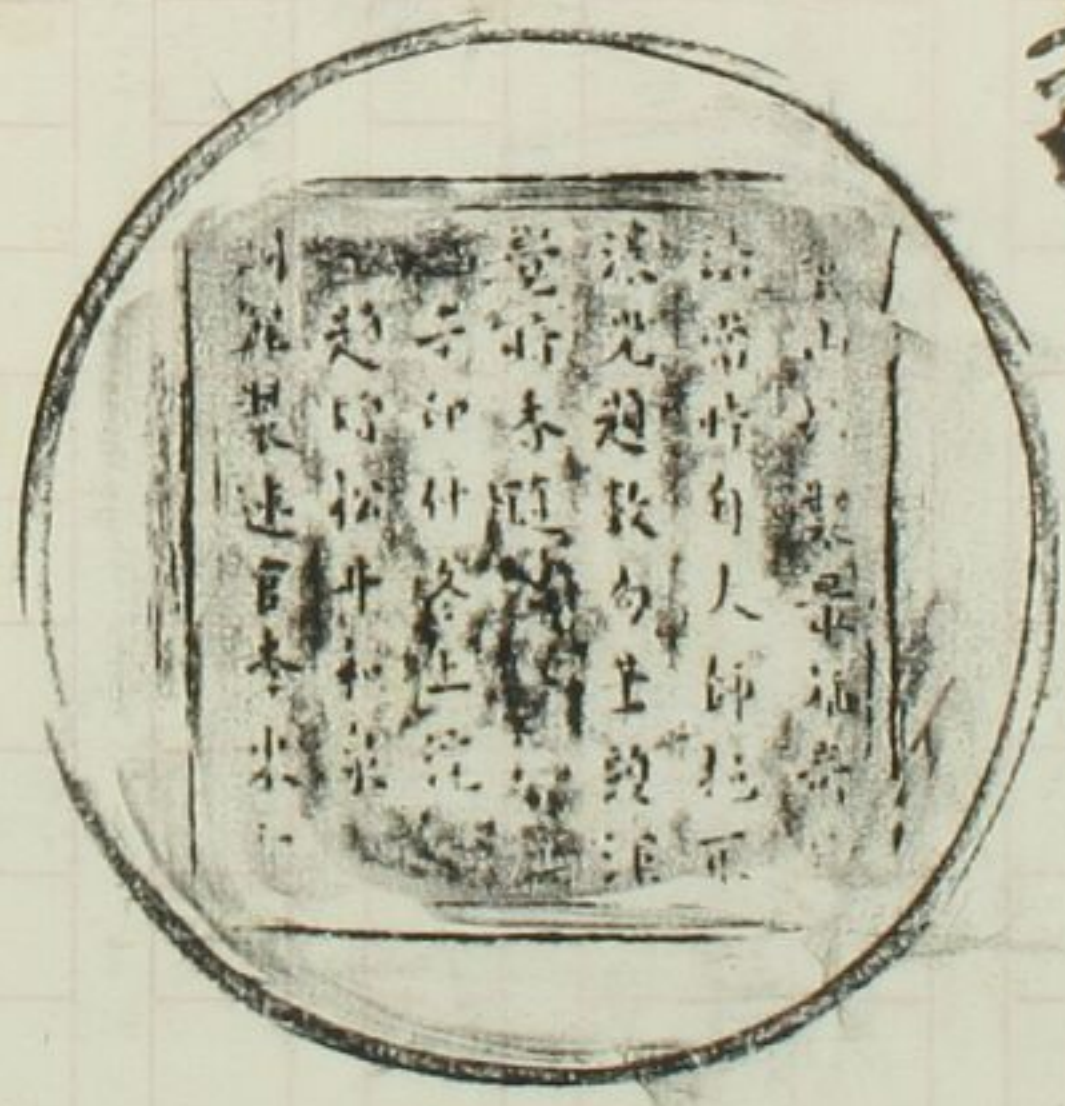
附記 功工六兵衛、畫く十六羅原一
幅を高くし、其のそとあるも唐紙金雲
と彩繪を用ひて、その體式の所由を
畫く、海苔のも、其の由を、
工二國、一、繪物、の、風、款、を、定

予後歎五改壽，祿官功六とある
及於既味を云々余は於此の正
亦尋常の云々は既云と即辨く
乙架中二層と云々

一志



一末



二

志



蓮山香印

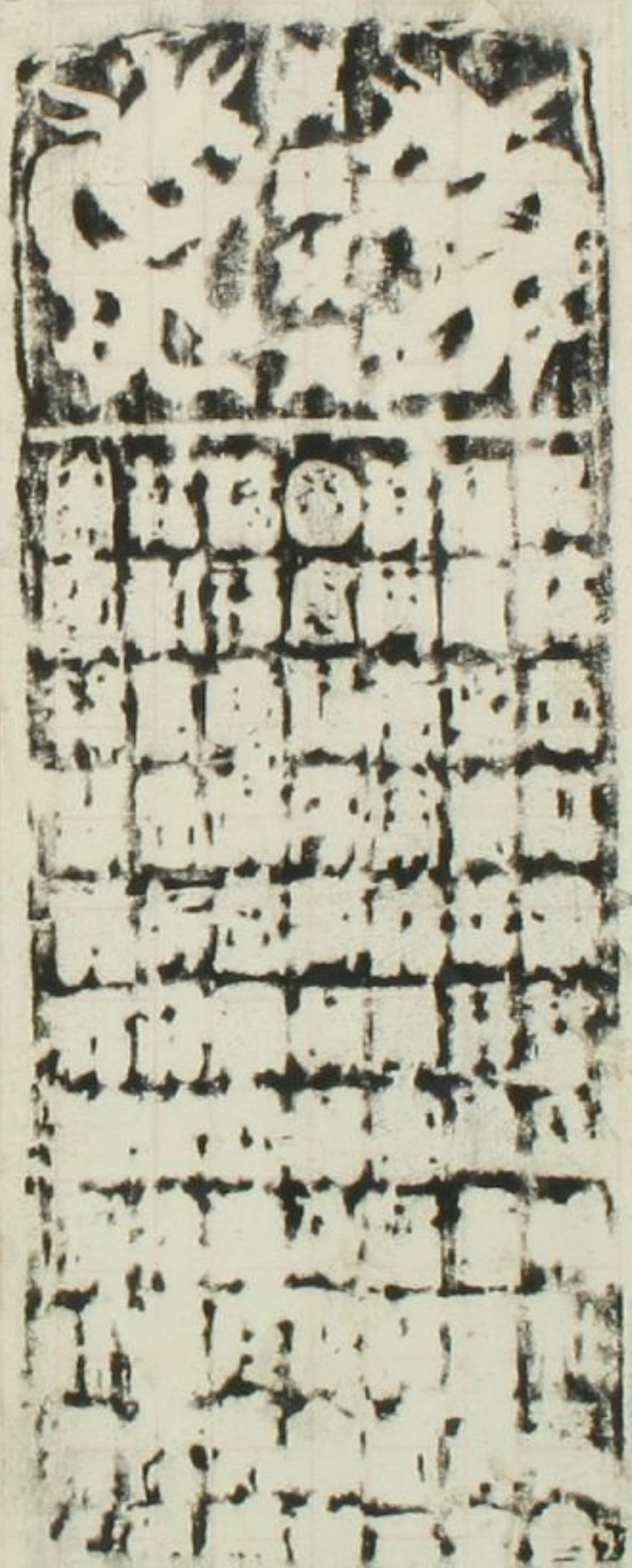
志



三



京



四

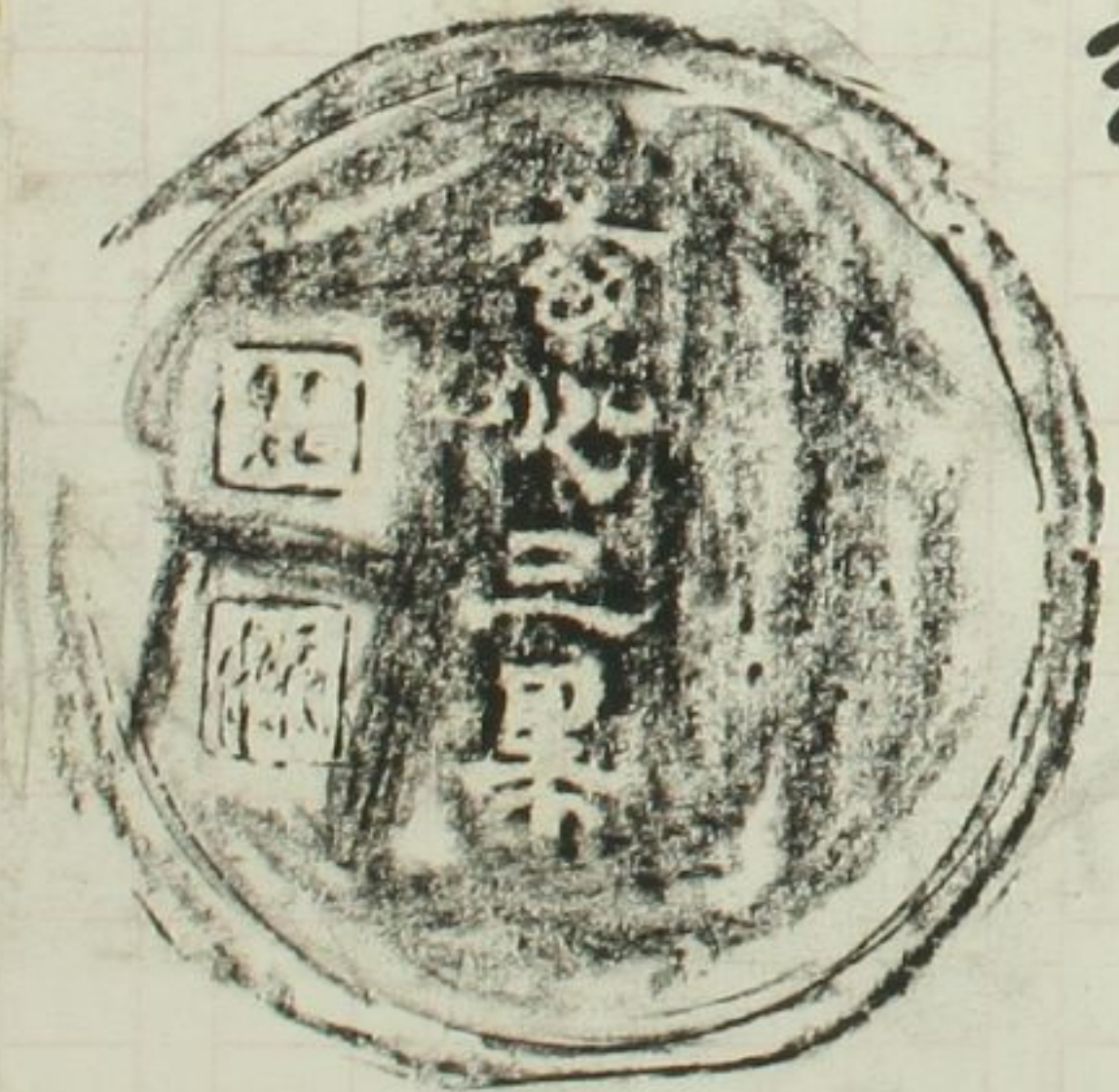


四

金



五



○十月十日 此日又教正の書画をゆゑ
三境界の書物に座敷古の肥田を鏡
の能くす共の古画に草山壽の横幅
四の書を茶巻画に写しつくす天壽の横
并に初紙の横幅に似て同十の横幅
諸家の横画不動の同く南極の横幅
の自由の横幅に似て福徳の横幅
いさゝか同く。皆多量の横幅の横幅
取味の横幅に似て同く福徳の横幅
信じての横幅に似て同く福徳の横幅

是の如く、厚二三の由をわたくし

竹木子に似てぬ紙の横幅

与えに似てぬ紙の横幅

はたしてとせよ

六の如く片巻に似てぬ紙の横幅

はたして用紙の横幅に似てぬ紙の横幅

せよ



□
清々々々

明々々々々々

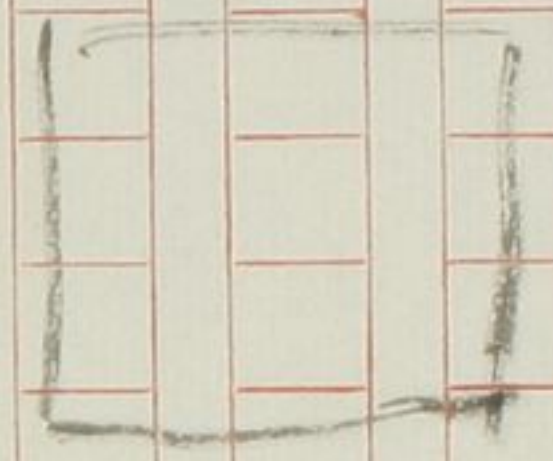
森中

戸心々々

水々

わんがこりあ

天壽口口



□

七十初夜

為之為病災何得交去年

昔有夢也其意更夢也林不尾

あふふ口口

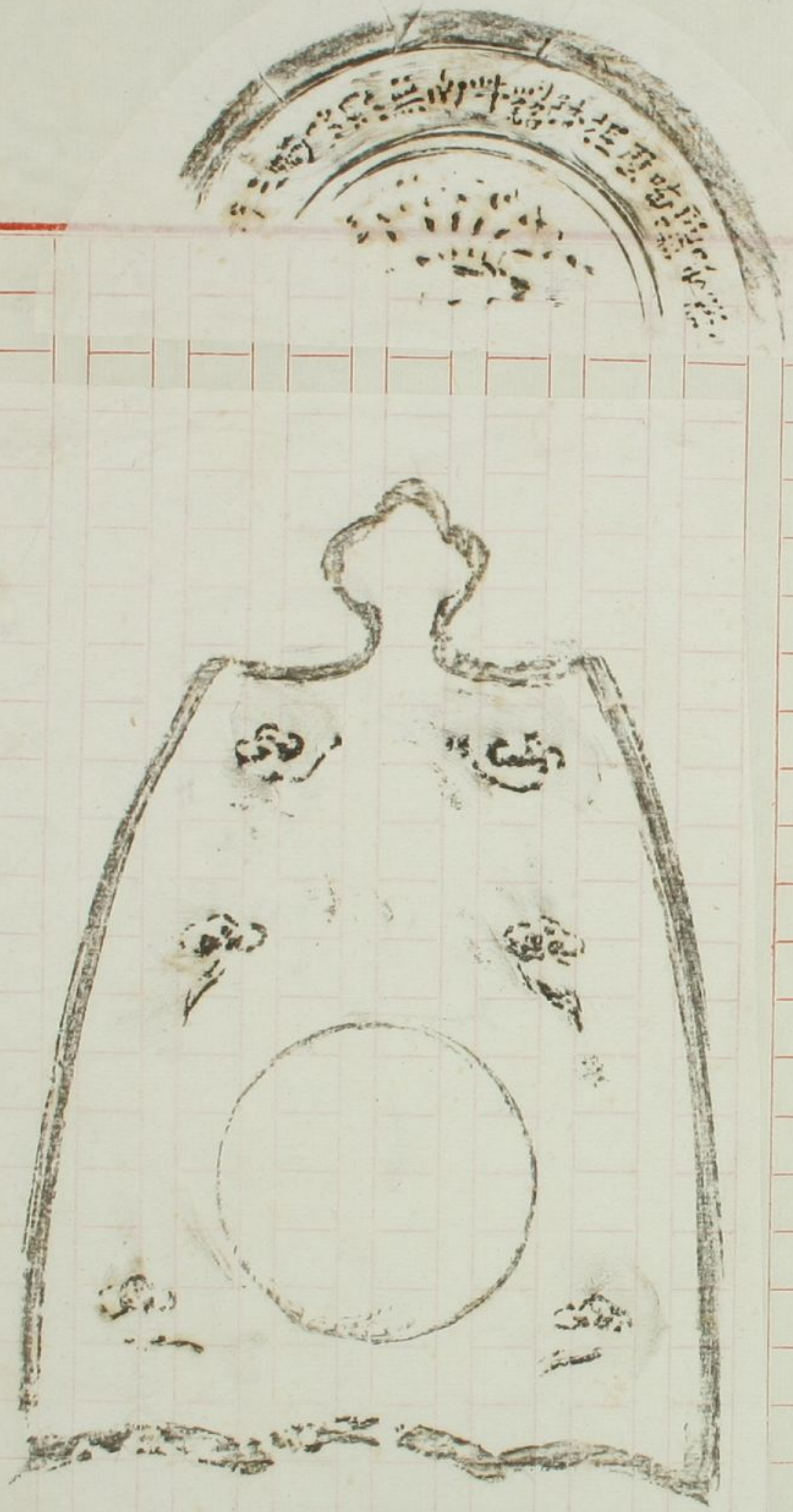


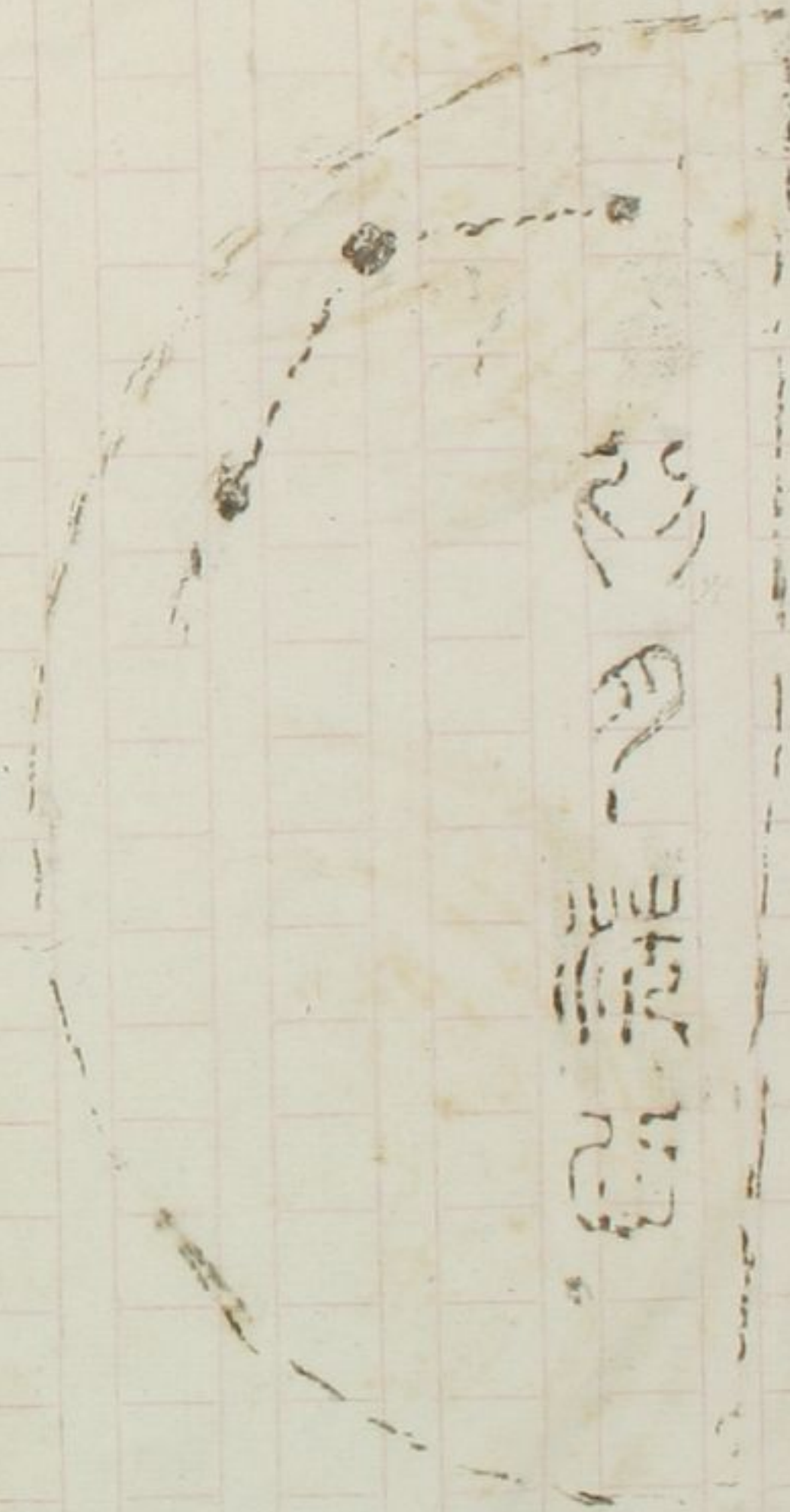
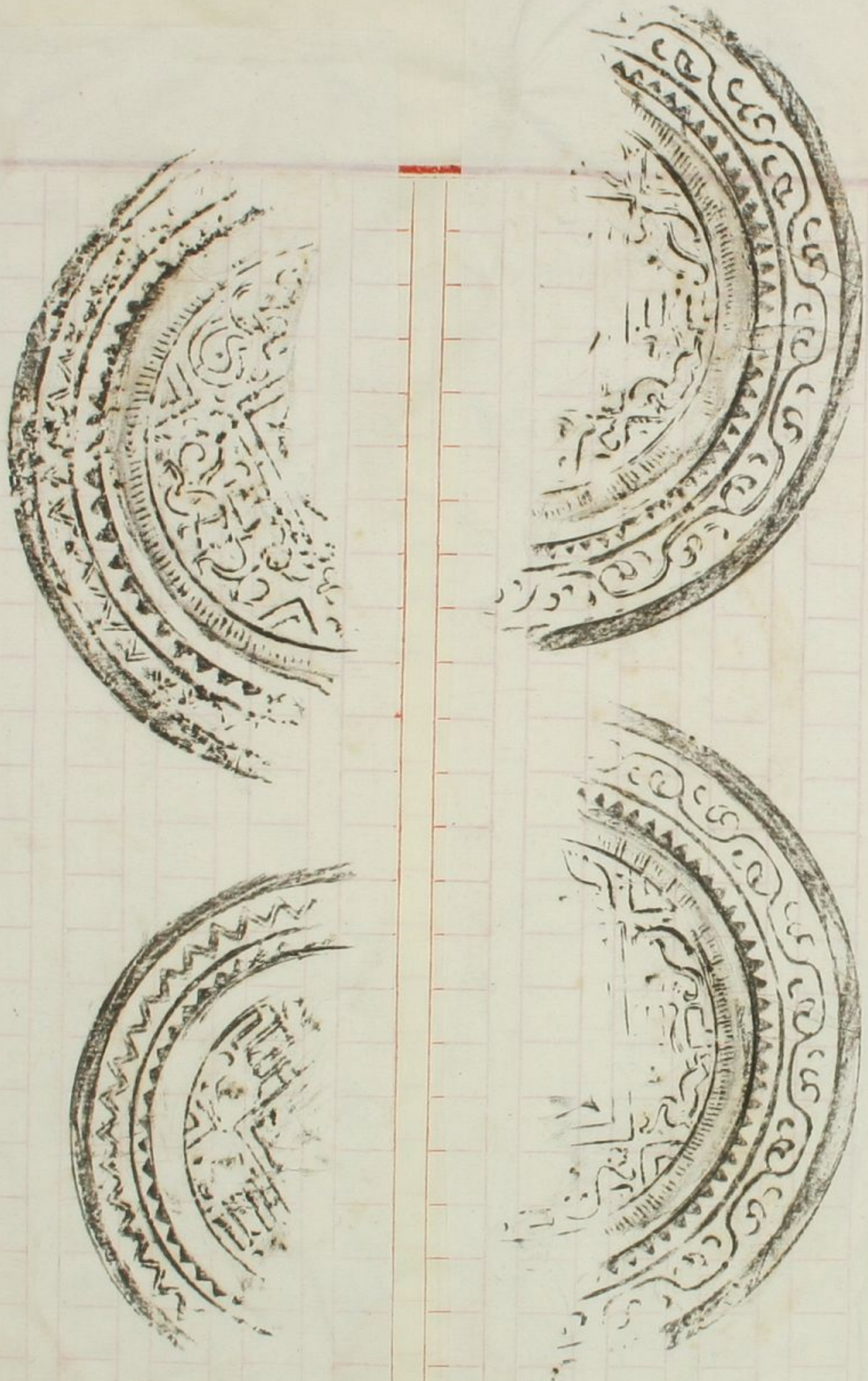
枚と及ぶ余の訪りし其の玉麈のしん流
干を觀る所も其の多くを思ふ心す
眼をりて刻し大いなる人ことを即ち
木村表こしと流す美し余を鏡癡を
思ふと花も又玉を意味する而も
いまの古鏡の風味を感せず言ふ多くの
古鏡をみるの機をゆり過る鏡癡の
心流をさるる所をゆり過る玉麈
をみさんことを志し行ふべきことと
ら用き余の心も玉麈の風味を極

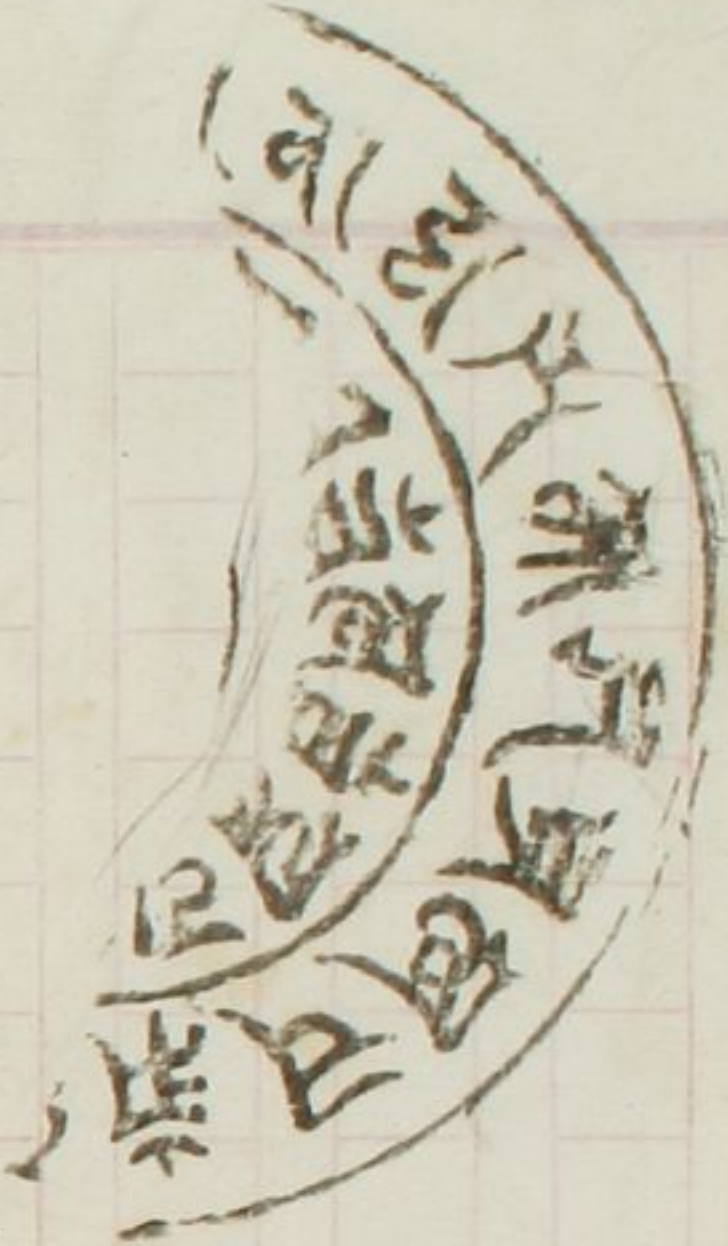
一言とあるの鏡と何れん意を供す
二つとあるゆゑも傳ふる其の七八分を一鏡
し終る採集の度うせとすもあつる地
り鏡行を和漢輯の三枚と流し漢鏡の
ありてもこの四十枚と数ふ六朝唐宋元
の鏡もしく和漢のこともあつる
あつる又形式の相違も十数種の多きを
心す二個の研究材料也余を此の
流しをえて如く漢鏡の特徴を
漢鏡と六朝鏡のあつる特徴のあつる

今を自慢せり、又遣ふ朝鏡の書りいふべきを
其のゆゑの代り若らたきうありあらず其の鏡
の精微其の刻の精細色は後代と由大
差あることを知んば其末元々もいふべき
其の鏡其の心の云々いふことを知んば
後鏡の柱もも遠鏡をたゞ換へるにのみか
うくまあるは遠鏡といふは遠家の物鏡に
さういふ内倣遠鏡のふたつともいふは偽なり
しるすことともいふは概して朝鮮鏡を兼
せりといふは日本鏡の物心のそのいふを朝

鏡を較するゆゑのことも知んば、たゞも其鏡







國書刊行

國書刊行



而もそのまゝのものを換して振動を心にとりまゝ
容れざるも借くる形式の異なることとの
時代の古今心の動転に因せざるあしむら
しむるを換してこゝにぬむ

附記 第一回と目録鏡の意
而も佛像の細刻ありて其面を神像
墨の色の切字の如くは縁海等也此鏡
時代神像の異なる等の流の如くともよく
くらしむる形式を果するものこと
七九の人のこと五山鏡(第一回)こゝ

七模倣鏡也他も模倣心と見えきこの
あるは強形式のりろくをあらうす
と見えこゝにぬむ

○吉田は正徳の三條公の獨に意し印用子を
刻す其の好ありて一〇枚見え其印葉を
所の川舟印を及んことを法を許さるん
辭目も花も或る人の印道を運出せ
たん從親を許さるは正徳印あり及
い其人と全部を一説しとうとを余をゆゑ
の光宗とそのたぐねる数あるは其際

物に余の如き人持しと意とし物入りたるも
皆梨を公印漢より載せたる所のもの也、法
瑞圓の意印抄の二紙他の六紙は文三條の
初に條々ぬめし一函に花しむるもの、
中井家傳の書體を好むもの、
一二其厚の幾らと能くさし、
其類と見え、
附記 印影、
字のよき印影、
此し、

梨堂印譜卷上



梨堂印譜

香雪閣藏

梨堂印譜卷上



梨堂印譜

香雪閣藏



國書刊行會



梨堂印譜

香雪閣藏

梨堂印譜卷下



梨堂印譜

香雪閣藏

梨堂印譜卷上終



中井兼之編輯
堀博校字

梨堂印譜



香雪閣藏

國書刊行會

梨堂印譜卷上



梨堂印譜

香雪閣藏

梨堂印譜卷上



梨堂印譜

香雪閣藏

國書刊行館



了多色寶印海中之此印為之也
其誤解之也故之也
志 十月十九日 秋 志 志

つゆり四みの里の太久馬子とゆき友那は
静かろくろの井井のゆきあや



制錢壹佰文 治源

吳道坊

制錢壹佰文 治源

吳道坊

吳道坊

制錢壹佰文 治源

吳道坊

制錢壹佰文 治源

吳道坊

の堀柴少人(成之)も昔前を望む由体とドを
一はるるに此の年物と名を定むる上
と一はくたる收ちるは柴少人の古物を寄
せしむる。その年物もさう今うの後多々の重さ
明れ少人の今もさうせざるものも有る。好の精
直に及んてその年の柴少人の新物も好の口
通に困りたる物も有る。是れ、柴少人の
田舎さうと云ふ。いふと云ふ。さういふ
んは柴少人の堀柴少人の此の古物と云ふ
柴少人の古物を寄せしむる。是れ、柴少人の

文部省

いふ事終七時三十分し、此書一冊力又教授

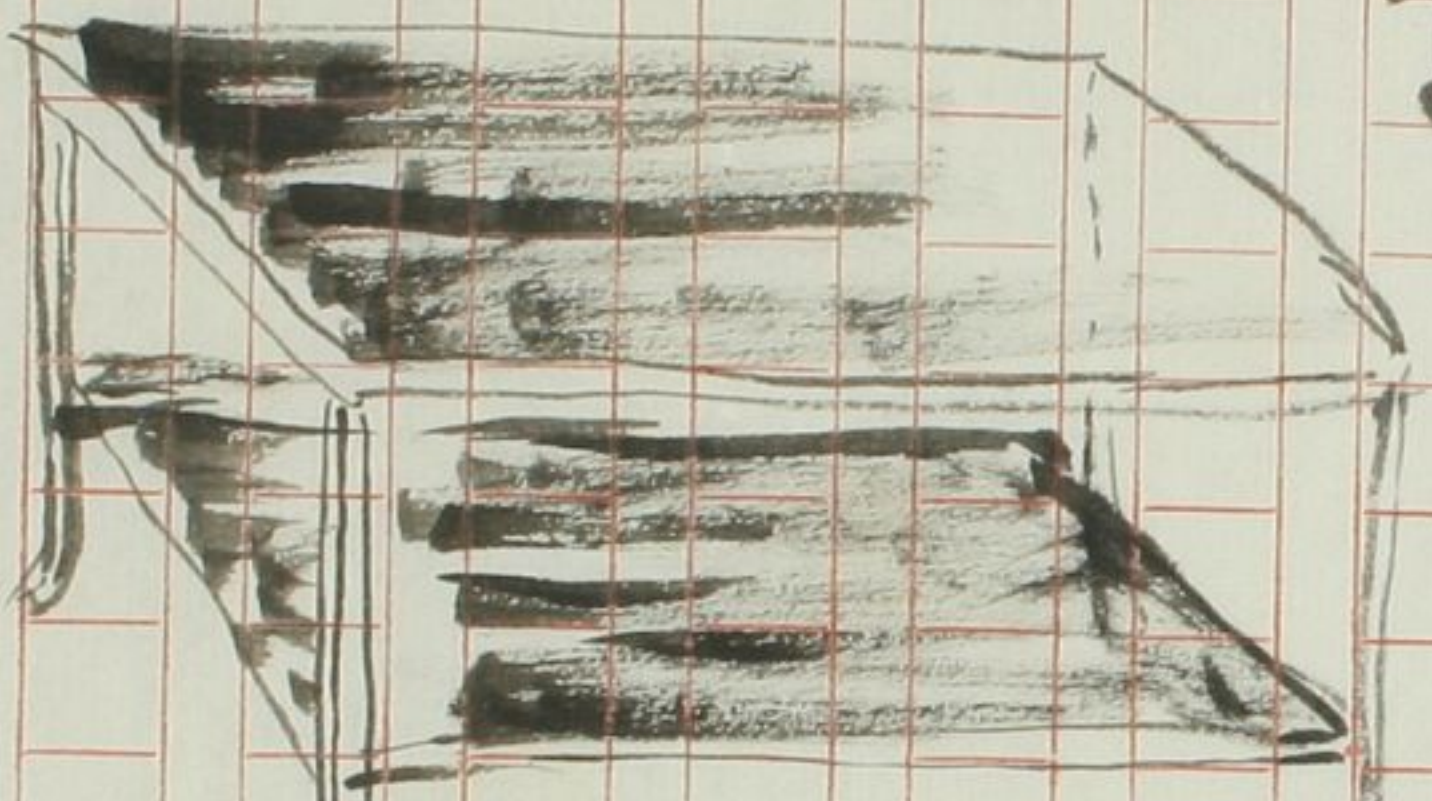
國書刊行會

らんことをおきんこいよ之んをぬむるん
の事あをきやくも其の事也(十月二

國書刊行會

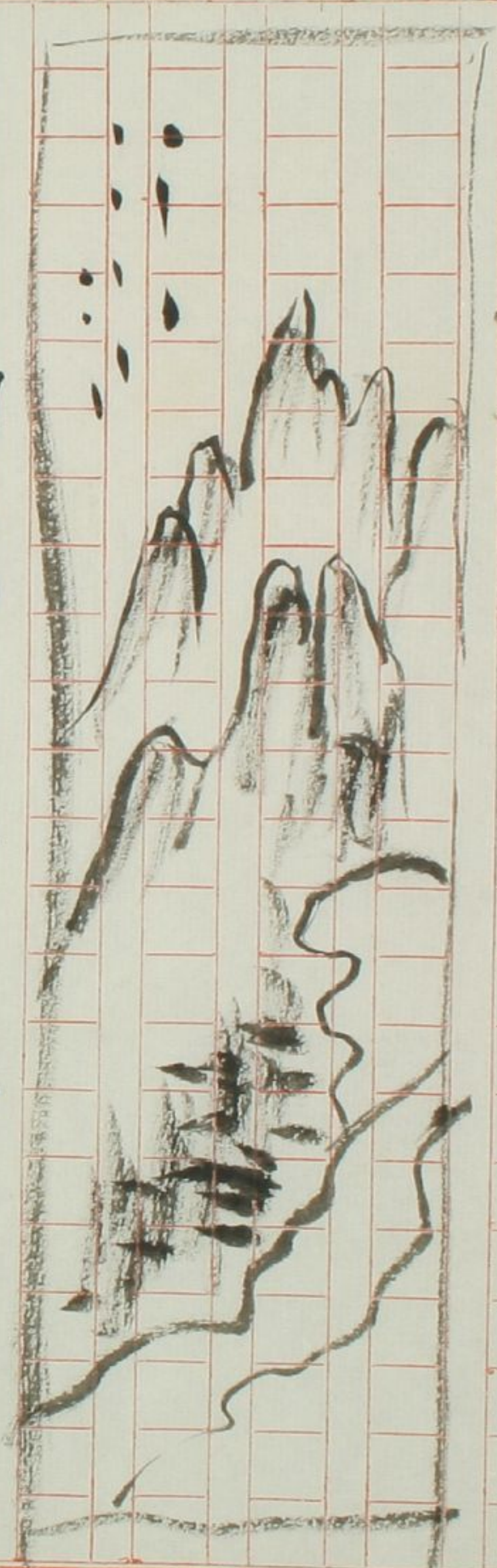
一程の風格を備ひ和具を脱しるる意は
 も多うとて、手購入のものを手控中のもの
 授法書をもいへお存通る意を画しき
 漢彩、字を描く上、部級白に九如圖
 七十一の湖南九表と寫す、字も又氣
 二行もいへる、まゝ、 京都の人多く此の
 家を知りて、山にぬき、その漸や、
 手草打とて、此を打して一丸とす、
 こと、まゝ、親身、
 此の九如圖に格も、
 たり、又、木方に、黒塗の冠、甚か、と、
 地

のき一二の程おある、
 圖の如く



こと大名の、
 此程の、
 用あり、
 粘工、
 敷、
 七印、
 (十月廿七日、
 行

と平らう入る能く其の年味をせめてもと
まらぬ成り



多到扶他にふさふさはは松葉かた山
絶乃る層々天をとり仰ぐる空を
為人宗 心を空に上 其の心
何れは松葉の二題の仰ぐる

うせに松葉は身刺仰る現る
の松葉の所は松葉の心
とて

高はれ一の心は松葉の心
其の心は松葉の心
松葉の心は松葉の心
松葉の心は松葉の心

同じの松の骨董高も 秋月古来の柳並
の同一松を並べ、古来の松並べの
りえくも今の家を並べ、松並べの
古来の松並べ、松並べの松並べ

擬す人々亦あらず能くもたふ又感懐服
好く自家の句を以ててことあることある古
香あり画の筆活潑に新しきもの揮毫
の所階る書せ而してちん実わと山阿
此と一様の具氣を帯ふ暖き一画を志し
清雅風の樹を風款するもちん又更し
こらなく山阿一派の風を殺し奇意ある
味ありし善し兼面白昇早石と筆好
るるは是の余古あり無好るをもつて
又一幅を擬し細本四尺八 柳枝錯保

の間は是 四五を筆く並と柳葉影く
清雅画家の腕と得て海を佳典を帯
ひり上部中央より方配ゆ映し、大印を
擬す刻云々 柳葉影く佳典の心と云
を擬する、細字と一詩を起す可く

巫山巫峡地垂楊波垂柳柳流新益

子嗣、信抄水傍

皇極 河合ら月と流在るを全併題

○唐田見山の蓮路の幅をおろす事と亦二
流以下の作家より書名高く凡款樹

出合に賜りたる泥勅を衣府みかきし
とて新簡也此の泥勅より國家の袍衣
三傳より存り朕も夏衣西具祝三
傳より朕を祝賀とよの物泥を
案合に方つてを止し之を採とす泥
勅也衣府とのりたる袍衣に此の字しと
心り何もの由に傳しるやき得し何もの
とて此の之を採とすの御意肝意
の文章のみを採一人の采したるもの
七ありんう御意を採切能廣地を採

六七寸文章六行袍のよも也余も少老の
お中への之を採出し、まきうまきわつて
もさるるんは御意の傳を採はるる
にあり物也十四寸を採とす之を採しとす
の御意し一衣を採のことも採念しとす
今より及所應を採類也採のりの方を
一を採とす、七條を採ひ入、衣を
何に採るべし何に採るぬ採の採りて採味
ある袍のあるを採ひ、早衣を採ひ
採りしと採し、之を採する、とす

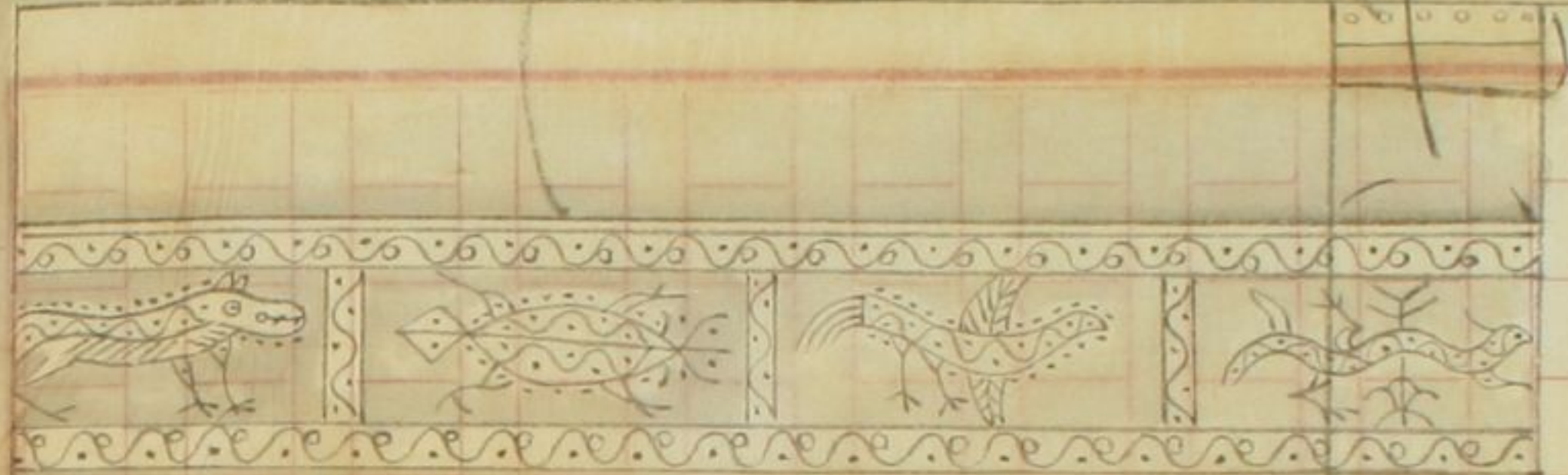
改訂目録

平山本方に伊藤公を以て出せるおせしりき
 者簡ありしつのはう内若槻流の後刻
 とありし甲乙丙三案を以て伊藤公
 とし山本にまよし山本公の意を朱書
 したるより一通ありしを以て抄物を
 ぬきも價物らしきものありし年々又
 ぬくことあり

○此の甲乙丙の三若槻流のありし出せる
 ことありしものことありし本の意匠を以て

一とありしを得る流るるを以て甲乙丙に
 以てしりしものことありし意匠を以て
 きりぬきしりしものことありし意匠を以て
 折書し幸ひは干支中の動物のありしを
 捨し四圍の動物の内意を以て他の
 三案を撰別せし干支の動物とす
 歴々の意匠を以て甲乙丙に以てしりし
 何の終末を以てしりしものことありし

○前掲平山巻、親とて春歌及右一巻終、余の
 架中、坊主位し、傍の都念ふも、巻終、西
 了、方古亮和信を、取放す、平山巻、返し、使ふ
 下、公、う、浪浪、美、と、東、山、若、の、勢、勢、と、の、あ、と
 一、湯、を、以、て、し、と、と、北、治、才、切、の、認、め、を、と、と、と
 新、年、の、も、も、真、蹟、物、を、と、と、末、松、古、洋、の、鑑
 定、者、海、へ、舟、と、治、と、と、と



古紙兜、帯、と、摺、様
 皆、と、川、角、不

曲、を、
 曲、を、
 曲、を、

曲、を、

曲、を、

曲、を、

雨晴乍雨陰雲不盡金燄其苦の如影
車賢徳の隆神四喜恩光更及中人
象

主を敬公日重の由る御儀之紅界の甘切
日楷者ゆゑに記しありと譬以山の御安
を載也大山未之のふたき井上安更之
九ふたき末下山好御儀(山の集に同じ)里田
組御儀の二葉をたふ善し何れも主敬公を
徳記と之のあり也堆ふ不各自と之御儀
ありを敬し自と一象に傳り山好里田

に御儀之を意見と敬し此のこゝろめく
山好御儀とありて念雪自好のま入
り同く後好河節ありて徳記の意見に後
す又里田の才入を各葉に敬見す此葉
終り伊好とく成りてしとて里田家
多々の様各と満る方間を愛印も
其由ありてと未山を護る何あり里田
家之北殿様を敬見する文書を愛印する
日高しかとす山ありては御儀に里田
後妻とて入るる深川折木高の娘とて

竊を著るときは文章を八九の一函を好んで出
て世に多く傳へたることを人々そののり
たんと愛印ししる也と云ふ 尤々南北文都
と評してすくじきと云ふ也

巻尾に載せる他の一函のまは敬心自中
のあり内状のあり好むるも文章を井上敏の
みと敬典と奉げんとするもつきに同人のあり
を後しとすとの文中「未だ三月十六日の故子
井上敏君十年祭の日」云々の下「亡友に
對し敬表す表せしむるに敬典一ん花及び會

し辭か追祭ノ典ヲ奉ケ且其印續也表辭也
ニトス云々トアリテ四号五号をわりの流字
の指定の身をもつて入る印利物の表
信を心自の心と認むること明く也公と井
上子と文内記も入るてそのくは二の
あり好味あると云ふ也

余は敬心と評するを公を崇拝
するの念あるを好むと評す此の一事を
及好味不極を崇拝するにすぎぬの價
と論せしむるは、所以也大正十一

月十日

○文の紙金才二筋の金更と約二千を白くし
 と紙割しあるの紙を三を併ねる
 金金才二田を若くするもつたも未
 千るえの上の紙の金更印刷紙を才一筋
 心本の関係も紙又銀の金更印刷紙を
 引金のたもつと先凡其降又銀の代
 表者と紙の押問えんの未監書する金更
 二筋を紙の金更印刷紙を金更印刷紙
 降又紙の金更印刷紙を金更印刷紙

たのしと流し紙の面側の未終の更する
 まう小紙換えるも紙の金更印刷紙を
 りう(十一月十一日)

○三省を：紙割と金更の金更印刷紙
 本館と仰ぐ金更印刷紙の金更印刷紙
 の紙割と金更印刷紙の金更印刷紙
 金更印刷紙を金更印刷紙の金更印刷紙
 心手紙の金更印刷紙を金更印刷紙の
 紙割と金更印刷紙の金更印刷紙の
 心手紙の金更印刷紙の金更印刷紙の

何うに九の三商を扱ふに、戻りする意を以て未成
 のる利を以て之を何事かの方法を以て引
 引き放す(後をいふ)二三十条の債権
 附随する(一)之れを一別人の手は統
 治し、他り之れを以て三商をも復す
 この基礎とする(二)其の、其他の枝
 権や派生する債権も、或は有償債権
 のこと(三)他は事業上必要とする(四)此
 等即ち(五)事(六)之れ等(七)所
 負債と債権する(八)二十條(九)の現金

之れを以て(一)債権に充てらば(二)
 通し解け得る(三)而して(四)科(五)附帯(六)三
 十條(七)の(八)債権(九)の(十)債権を元
 り除き(十一)是即ち(十二)二十條(十三)を債権
 として(十四)残る(十五)債権(十六)の(十七)債
 権(十八)を以て(十九)元利(二十)を以て得る(二十一)
 并(二十二)之(二十三)難(二十四)言(二十五)回(二十六)業(二十七)者
 三(二十八)商(二十九)名(三十)目(三十一)は(三十二)難(三十三)記(三十四)考(三十五)し
 困難(三十六)と(三十七)可(三十八)し(三十九)唯(四十)の(四十一)考(四十二)考(四十三)と(四十四)此(四十五)様(四十六)

兼して三書を讀さんとすとの中心あり
ん三書を讀みたるの事と困難なる所は也
頃日或る体なき仲絶の位主ニ之と志
んと欲し大隈氏も朝吹英二と振き
善徳の事と振舞ひて除余も高き事
之書をいふ所を云々し朝吹也或る迄南
の的様は北もお申し方を元々しと差
い其の方法と振舞ひ家を理を其の振舞
り代りたる科をいふけ之れは完成を仰す
ると世に其書を傳印し傳へし三書も其

後流の礎を以んと略々余の安んじ回念し
そのもめありんて其の流を未だ外可
らば仲絶を出すの体なき通すなり此
流く送るるを整理記書きし事也皆同業
者中より出するにあらざるなり其の
如末曰業書の歴史なりとを檢にす也
ることと其の变化を親しく核す也
するの必要の下し核すなり(十一月十二日
校ある事)

○十一月十日平山君と核す天孫一面を

太宰府都府楊

瓦研

手面

長方角
の溝とあり

全字

都府楊の者瓦を

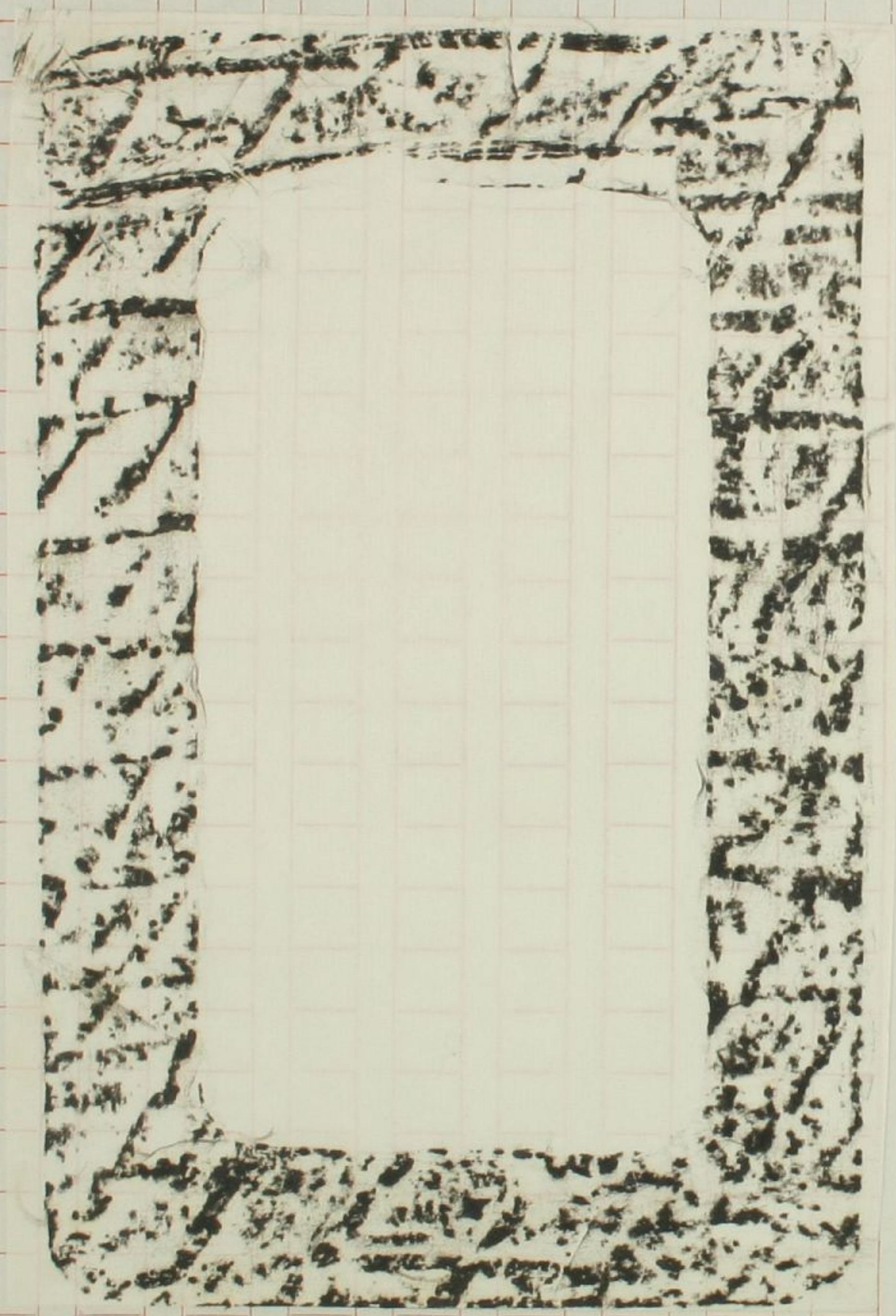
白也

の指合あり

杉林漆の板

印文
此の
人

とあり



外ニ四帖一

汪棟の筆ニ倣ふ此人耕硯田の事也
元々同

汪棟字仙梅號我庵字意花并秋
虫思解雅韵天我

と果して死

此帖おちるお茶一 松木一 秋香と
蛙一 蓮根一 松木一 草紅一 水仙
一 今六枚也

浙流の意致味あふなり

外ニ草履の江上春を初くしる初見三首一
物作り事ありんか大の期二の番宅を死
と梅雪と決せんとき (十一月十五日)

の意をの松竹の所みぬこ山岳と梅心体り心
草の遊心うけりんとき地をおちりも地の一珠
又香松ありて是より草山瓶と記るなり
直也即ちここにさす十海のうらみのこもを心
えんを固を以て大工とてくる大工同刻
こあいの松心を施し決しけり葉左の
しん心とてくしる余り自ら家心をもま

刊行あり其の困難なるも免れざる歎
 ○本年初冬刊行せんとてあ三年未だ志きき
 ぬ脱稿を志きし其の例叙日本史十
 冊と総論の二とを全部の印刷終了し
 総論の稿を出版の経費を省し居るの
 由あり也定方ゆきなきが志きんとす
 リきと躊躇くしと之比専断のめ
 也諒閣の誠をうけし一般の志き
 しカチ、加く之を前巻の改定を固き
 大なる難細考を興へつ、ある折、折

角の大志を具志すべきのめりあり
 あり終る未だ志きしと之比専断のめ
 リ

○大隈伯の外交大政史と伯は其苦心
 の著也大体の骨子伯特稿の親筆に
 事定るとあり其の如く、いま全部十二
 冊あり、内若洲四冊の著あり、其の
 あり、その比きなきが志きしとす
 伯三者を、托して之を上版せし
 由、之者も、特稿の著あり、伯出版即

後上之丸を上格せんことを欲し金
 田に囁き金芽種す。能く下、能く上
 と因難す也。何んぞんが伯を自若を必
 する者乎。種とえん下ものも、互信し、
 川ろくも、能く下伯の若と若も若く印
 する。之を、能く下伯の若と若も若く印
 二十年史の出版と既往と格を格と
 格略の以て、國書刊行會の位を破り、
 リ、格と若く下もの、國難あるの又、
 外交大勢史と、能く下伯の若と若も若く

収布するべき、國書の氣、うき、北書、の困
 難、す、格と若く下もの、伯の若を、
 得る、所以、之、伯、出版、印、の、能く、
 と、え、と、以、つ、て、能く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、
 の、若、と、若、と、能く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、
 所、も、も、格、と、若、く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、
 的、と、之、ん、つ、て、能く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、
 リ、格、と、若、く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、
 を、出版、し、つ、て、能く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、
 何ん、と、若、く、下、伯、の、若、と、若、も、若、く、

三行書山と云て清史考、海運考、二氣の考を編
 リ唐の書や七紀念の意味を以て或行考、
 出政の成印を四行とんと大方略を決し子
 収備に大隈存時と大方略史の編輯會あり
 せん、始又考名を如何とせん、きか、就
 き、行し、伯の而奇、う、意見を聞し、
 伯と、是、大方略の二字を要すと國執
 事、外交大執の文、開國大執史を、
 の流も出、い、い、い、い、い、い、い、い、
 立、終、大執、開國文と、い、い、決、定、す

揮、考、と、り、送、揮、と、い、い、い、い、い、い、
 リ、余、と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

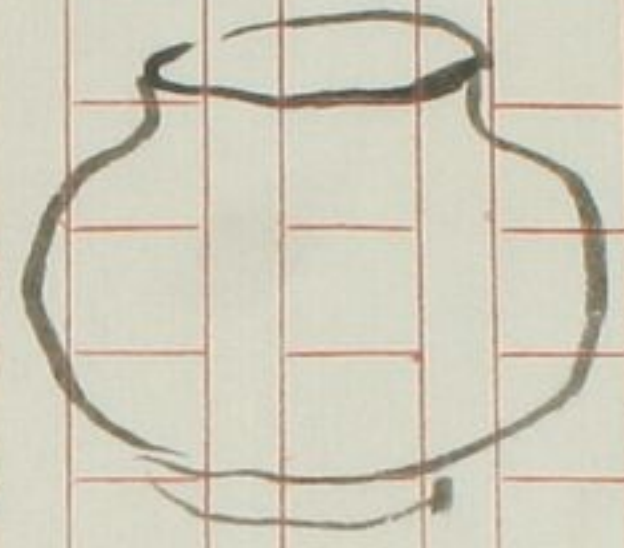
○平、平、平、東、東、東、の、和、和、和、一、と、い、い、い、い、
 あ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 印、と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 始、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 紙、の、代、代、代、代、代、代、代、代、代、代、
 物、見、見、見、見、見、見、見、見、見、見、
 他、人、の、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

いふ此の程の早給はる體を破るは
しゆるもの大に朔二ののけるなり一六の
女の書の中や終末に事概の法を上に家
の程を足ることありき多く古に此を
家と明淑ありて之を異するは
つと、その事定むとふ大に方を裁して
ふ、何れも平曆の事給を多くあるは
らへんは破らしうきも自分之其給を
と信す體ありて而もうけんは破入りて
つしと一紙大に一異給を破る

以終終括ひ目していつか新言を
こへんを一を之較に放脱也先づ其給
とを一のるん異試みよとありて
し又所見を擧る回之疑の代り分る
異給も亦所見を見るは、このるんは
何れも多し新言に精進する思ふは
曆の花より多く何れも、何れも
し得たるもの也此程の事給を見
にあり大にの破入終末のありき
終末の破入は、終末に、終末に

元十一月廿六日(壬子)

○朝解由急を南の末果集来り貴瓶
内三十枚正と見たり、高き所との抵正
高麗出也余は其の瓶を贈るに於て
一物も贈らばいと云ふと傳へ高し
才子無中一花瓶を乞ふ、辰砂を以て花

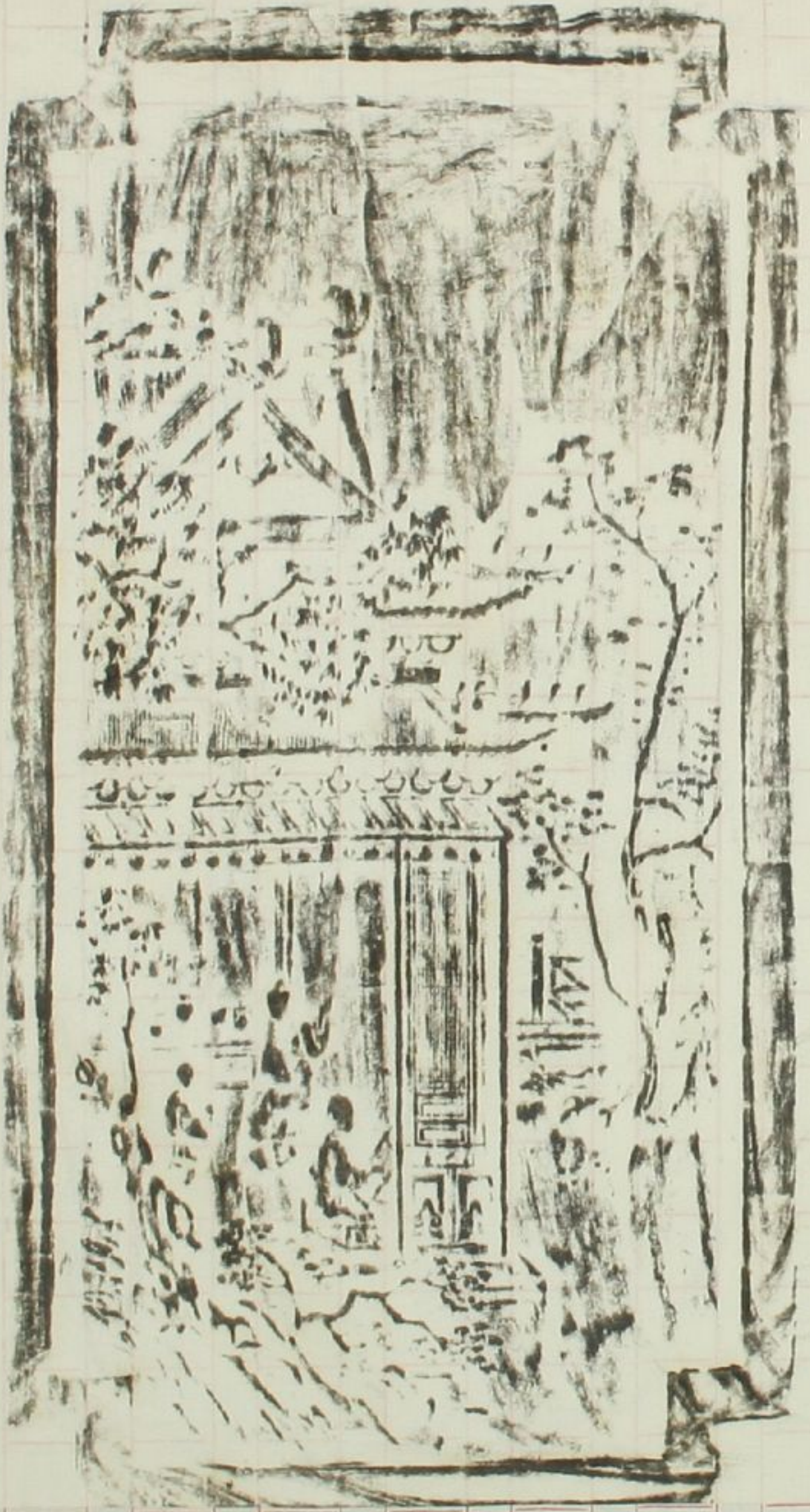


と高く、高し李の瓶殿を
乞ふべきに、瓶の形圖のこ
とく、腹印石口大さるるに、
き大塔、辰砂を用ひたる

本邦の瓶も亦に稀なり、如名供をうす所
此等なるし乃ち二十一日を以て贈らば
花を飾るにふし、の所と乃ち之れを入る
堂上入す(十一月廿六日)

同日平山布を飾りて一巻を以、木肌瓶瓶
大香合るる、其の他古の瓶をも古も挿入
し、蓋意に在受の花押あり、松楓桐若
こ入ふ、余の香合印を以、紙を以て
又贈らば

○孫蘭中、あふたてに、於て去たるを、十日



○平山や、松を号遊するもの四、一と乾庵年
巻の果圖の如し、一と奉入紙の香かん
書をえんまの治海と書、海舟の富んを
心すと書く、めいも書人、ふふしい細工
をしつと乞しくぬる方杜るんもどこと
こゝ味を、蔓の上、都多一雙箱入しあ
り、蓋をむく、む、おとこと朱漆の銀を
廊、すゝむ、何のふゆ、心と書く、一
の蓋、終る、いとも書、一、書、書、書、
る他の一と別條と、十枚、記す、のふ、也

権臣、御前、四、所、回、と、書、備、前、池、見
以、(お、か、ら、あ、の、物)の、書、と、書、書、唐、と、五、書
る、挽、の、紙、中、極、め、あ、と、書、書、の、三、も、を、取
り、あ、ら、と、書、い、あ、あ、き、味、書、ま、と、見、こ、く
し、書、あ、ま、上、頭、あ、い、と、書、銀、と、あ、つ、と、書
形、と、あ、ら、い、し、い、と、書、あ、め、也、内、家、紙、前、の、地
紙、の、あ、ら、紙、宗、紙、紙、あ、ら、行、脚、の、あ、ら、の、
こ、と、と、書、い、と、書、い、と、書、味、あ、ら、冊、子、也
此、も、七、と、片、紙、も、平、の、紙、也、他、の、一、と
古、墨、紙、者、紙、切、一、冊、天、堂、和、紙、の、紙

金貳千貳百四十四拾壹元

工字學校土木科設備費

一金參萬參千參百六拾七元參拾七元校內整理并推工車費

內譯

金四千七百圓

外構鐵柵工車費

金四千五百圓八拾壹元

校內電燈設備費

金四千四百四拾壹圓七元

庭園並通路工車費

金壹萬七百四拾九圓七拾八元

建物移轉并改築模
樣替工車費

金貳千貳百圓

石垣工車費

金參千九百七拾八圓參拾六元

校舍之塗漆替費

金壹千七拾貳圓八拾元

校內電話交換設備費

金壹千七百貳拾四圓五拾五元

外構裏側木柵工車下水
改築費其他

一金八萬貳千七百四拾參圓四拾七元參厘土地購入費并家屋移轉料

合計金四拾參萬貳千四百貳拾壹圓貳拾參元八厘

圖書刊行會

〇又、二三の條を辨る

一平金蓮五律、長文條

ギヤマシの鞍の所
一ちるまおせり

平玄中一の條款

以練中人平金蓮一の條考たつ條也

の云

果方連南河海天ニ徳子湖平の月海

山近白雲舟舟舟人持波客湖酒徳

長窮愁書未就疑髪実御催

在果方の月

平玄中一

考の條考二似て之し

大江丸 まゝくまゝ 二枚

一と之行むらゝしの考附え

御房ニ大江丸の考の由來

を記し又他ニ類 なまき

と云ふ

一と回程の條の類 なまき 一句を考

す八十七才大江丸と云ふ

なまき なまき 考

考の考 なまき

早稲田の杉本大氏の自筆と
目下其蹟を尋ねることを
はたすと

二枚のマリリ上下の片一
と其地の及所を大氏の
の及所を大氏の
の及所を大氏の
の及所を大氏の
の及所を大氏の

五徳をもち マリリ
ふしく者きききききき

板額を而

あつたところの
の二
前の
す

おの
樂を
の字を

重
地
の文

一 宋の物にあらぬのひきまの
 越ひさき後理を名の由と云ふ
 今も爲しあらぬ所改道にふはるを梅
 の北顔まのこころ梅の中しよの也
 一 宋の鐘の依約合と云ふは
 洛の布人合を好
 七も五六ぬつるを
 此のあつてを欲と云ひぬる
 真つて天眞流石の書集
 一 古物復旦記

一 宋の物にあらぬのひきまの
 一 宋の鐘の依約合と云ふは
 洛の布人合を好
 七も五六ぬつるを
 此のあつてを欲と云ひぬる
 真つて天眞流石の書集
 一 古物復旦記

古織部集

相生まの錦所の歌

此代歌 一々花と出ず

此程のまのむる

塔しちのりん
花物印ありし

青いねのまのあふねの歌
字ありしとこゝろ今可なり
漢のまの輪の歌一話と昔
さよをまの年



翠

翠

翠



○杉本鳳著として大田傳中守と云本茶打り方
向と助くもこんせふ未の茶中ハくく不
田と著末の茶中として^{道徳又徳と云}茶根の政策と云ん
く此者同支脚の徳のものと思つる茶打り
寺中茶漸来の人山つちを^{茶中}茶中と云
茶中と云、本茶打りとして茶打り
茶打り

○本乃山人の仙臺来印講を一事として云
事ありともありと云事印講之家茶打り
其端に本乃山人の印講十首を載り

し或る人の云々其の珠卷の瓦に書し
と云くはと云々の事一印の瓦に書し
味ありし本乃山人の事一印の瓦に書し
りよ終るは^{珠卷}珠卷の瓦に書し
ありと云し此の語を^{茶打り}茶打りの
事歎(十二月十三日の記)

○唐の司止江津の書物と云ふ事
へと云んは^{魚鱗}魚鱗の観方と云ふ事
母を檢む^鱗鱗の法と云ふ事
云ふ事下におありし^洋洋の事歎

華の徳を考と傳ふ事し以津の心中
聲をと見ふ事と一見合指事と
わの為め身とこの也好し意をを徹する
と見えおとせり且つ便交深中せ十
より也

江津の洋字書ある観音也好の徳を
江津とてめ代たさく書名後の徳入
と考し傳入元合りなり

考以て佛名珠を佛の基世文の元
流世後考尚一書と七指表の結果

司馬以津の書名と後人の徳入を
ことをもかたしと考傳心たあり考尚
七と後人の考を考ること明けし元
末うふの考を傳へを考くべんとの
業、考の考し

又記す文寺四の考尚一書とを傳
ふ書名と三流流相自考との考と
載りぬるもいふる考ありぬるも
考尾文書の考ありぬるも考と
考し、いふ考、これ七後人の徳入を考

よく天竺文の糸を糸体
の考きくことありき
又この糸を糸体に入ると
糸の糸を糸体に入ると

北等の糸を糸体に入ると
糸の糸を糸体に入ると
糸の糸を糸体に入ると

○維志園の神法：刻す（き）文を柱湖
村：鳩とて流るる文意：形式：拘し
糸の極高とてと寧ろ時文：改めし刻

見

初此園者誰を南祖先廣居也名以維志者誰
鐘山伯温先生也園何以就荒成辰四誰兵禍也
何以妻親官置越後府也及府瘠而廳撤
園亦不治用者入焉其者行焉嗚呼僅々八
九十年間園之荒瘠有如此者而區々一園
之存亡亦天下治乱見焉園猶有屋數宇為
兵所燬止賸一耳先考乃宗鋪君澄之鄉人
移置岸右歲月之久屋亦甚廢為次者鄉人
平月謀新築費金而甚廢為者再修焉有

於是擇其欂櫨榱其助礎復諸園中以爲
小亭乃芟除芭蕪培植竹樹薜之乾澆
之石之傾夷之亭可以容膝園可以流盼其
親雖未能復舊年亦將以志於幹蠹也困
勒伯溫先生文於碑樹諸園之 位且自
叙園之所以有今日以記之碑陰

○序此誌志の子純マクリを體心と志其
成るの云々

猗々矯角牛 吐月又念朝 不妨長吉
日 時卷五收禪 建口口

○繼志園記 一也此年と八九人の會之日
秩父之村 高毛ととふる方元波ととふ
於天波天志と圓り再方 地黃と絶し
五六十字を刪り之章一 漸くレマリ
進を云々

繼志園記

園在越後蒲原郡水原望族市嶋光唐之所開也光
唐之考曰十吉好慈惠視人之急猶視己急嘗
有嘗別墅之志 木果而歿 光唐繼 欲成先志者

奉火七
起烟
と改り
ぬ

初
午

其等之為身人未便顯落乃罷其暫休業翌年云着

更甚建署清復工聽之凡五年而畢因以奉火

者數百家有感激流涕者市島氏所有福嶋新

田以下十餘村戊子地震佃戶屋舍皆山崩壞

先廣又出三千金貸之其極人濟物率此類也

野植以花木數十株自然成趣無珍奇之產

無華美之觀先廣歿長子宗輔承後一遵其

道不敢後也徵因名柏余曰夫孝善繼

人之志宜命曰繼志余識市島氏三世乃祖勤

而慈惠乃父其家道而務施宗輔鋪謹慎而守

二

初
午

初
午

有年矣天保丁酉歲大饑餓字載道水原土

豪相謀各糶和粟極賤其價然細民小戶六窮

匱已甚無資買斗升仰天大具耳先廣見之

惻然以為及今官野則民得食於工而庶幾免

飢餓矣是先子之志也因去相地宅後有浚

池可填以為園池馬中嶋村土豪數家分兩

手先廣乃購之聚小戶不能自食者謂曰吾

今填池欲服工者聽其法五人為伍伍運土

一升者給金一方日中餉以飯五合民喜而趨

之疏者甚眾已數月先廣罷于甲初幸欲林

國書刊行會

約雖性度不同其~~為~~為人則一也抑市島氏祖
是^以其盡力於農^職田園蕃殖殆遍蒲原一
郡官家褒崇許以姓氏佩刀且加賜三口
俸^亦奕葉隆盛州内罕比其堂非積善之德
慶那樂善祖宗之志也繼志子孫之責也
嗚呼是此國之所以不可無祀也歟

○十一月廿一日 風和を冒してす山をこし
を過り對山耕不^必名聯指^為山々^の田圃
田圃外耕不^必満^のを畫^くて^も古^の田

也燻心^のた^まむ^の事^を長^く持^つて^は外^に
其^の後^の秋^もも^も秋^もも^も引^出し^て
中^の者^を入^し令^し其^の上^に印^を出^して
を^載す^所に^或個^の孔^をと^り側^面に^も
浪^のの^香の^果も^もと^り香^を和^を過^しゆ
昔^の持^つて^は為^し徳^の初^代の^よ
く^も持^つて^は

鏡の
白香燈
七^の七^の禱
初^の立
細刺^の國^し其^の甚^き也

東南

茶坊

徳信坊

茶坊

鉄

ちぬい海

呂宋

茶坊

二

白佛前

杯

時流るる心の一所也

一年の終りよ悔み

本年も終りを迎へてもいふとあんとすけつり
しど松のつゆを案ずらん本年の一大事なり
光帝の御用瑞女もこゝろこゝろすすも
し、余のこの校におしよる古書かきり
年よりし、何れとすめ本年も開校三十
くあり記念の式典を急ぐも余余
しよる殿の衝にあり尺もきりし
ちぬい海 瑞女もこゝろこゝろすすも
ちぬい海 瑞女もこゝろこゝろすすも

し余の書を伝ふて何となく故郷を去るは
 故郷の余の生れ命とて七三の命しとんるけん
 川余の生れ也 ありんらんを許す也此の如
 楽し、 (大正元年十二月廿五日記)

以下全て
白紙

